

念本であるが、魯西亞武官の服装の圖(原色版)の如き美語の外に、阿蘭陀船や、田島や生活の道具や航海器具や武器や杖時計や洋服や黒奴踊等あらゆるものが、微に入り細を穿つてゐるのみでなく、数字が蘭語でかいてあつたり、紅毛人渡海路程譯説といふ一文などがある。これ實に當時の日本の南洋航海に關係のある文書であつて、之を讀むことによつて、萬里長沙などの地名の考證も出来る、日本交通史の材料としても見逃すことの出来ない美本である。最後に申し残したが本書は久原文庫所藏の長崎紀聞によつたものである。(藤田)

○大阪地名辭彙

佐古慶三著 公立社刊 定價五十錢

大阪の人で大阪を愛する第一人者、佐古君はさきに大阪古岡の出版を爲し、其後いろ／＼の著述もあるが、今度はこの小冊子を出した。オホサカの地名凡十五種たとへば、イチヲカ、ケデウ、マツシマ、センバ等著聞の地名について由來、用字、沿革、地域等いかにも明確に説明して、多くの異説を完膚なく道破してある、本は小さいけれども、大阪の歴史地理を考へる人には是非一讀をすゝめたい。(藤田)

○地歴研究

第六の第十號

熊本地歴研究会 一册二十五錢

第一師範の下間忠天君から送られた、同縣の自然地理學的考察や地理教育私見、新興地理教授の實際など面白い研究ものがつてゐる、特輯號であるだけに菊版六十二頁、努力の跡が見える。(下)

新著紹介

雜報

○日本第三回國勢調査速報

内地總人口六四、四四

七、七二四人、世帯數一二、七〇五、八九六と報告された、大正十四年以後五年間に四、七一〇、九〇二人の増加で七分九厘の増加率をしめし過去十ヶ年に八、四八四、六七一人を増し年平均人口増加率は一分四厘にあたる。

内地人口の密度は一平新一六九人にしてベルギーは二四五人オランダ二一人、イギリス一八六人について第四位であり、たゞし府縣によりて密度に不同あり、東京府は二、五二二人に達し、大阪府は一、九五二人、その他神奈川、福岡、愛知の三縣は五百人を越え香川縣ほか十二縣は二百人以上、全國平均一六九人より高きもの二十五府、縣、低きもの十八縣也。

今人口の多き府縣より之を表示すれば、

	世帯數	人口
東京府	一、一二五、七七三	五、四〇八、二六二
大阪府	七七〇、八六八	三、五三九、九八九
北海道	五〇九、七五八	二、八一二、三四二
兵庫縣	五六二、五九九	二、六四六、〇五〇
愛知縣	五二一、一四六	二、五六七、三九八
福岡縣	四九六、四四七	二、五二七、〇七九

新潟縣	三四六、六八七	一、九三三、三一二
靜岡縣	三二七、八七一	一、七九七、七七八
長野縣	三二七、八七一	一、七一七、〇九七
廣島縣	三六〇、八九七	一、六九二、〇五三
神奈川縣	三二三、三〇一	一、六一九、五八四
鹿兒島縣	三二二、〇八八	一、五五六、六七四
京都府	三二八、二〇二	一、五五二、八一三
福島縣	二六三、九三九	一、五〇八、一二二
茨城縣	二八一、一一〇	一、四八七、〇五七
千葉縣	二八一、三一六	一、四七〇、〇九九
埼玉縣	二六五、三五三	一、四五九、一六八
熊本縣	二五六、二八五	一、三五三、九〇八
岡山縣	二七四、九一五	一、二八三、九三五
長崎縣	二四一、五四七	一、二三二、八一二
群馬縣	二一七、〇二五	一、一八六、〇五八
岐阜縣	二三五、〇七一	一、一七八、三六六
三重縣	二三五、七〇五	一、一五七、四〇四
富城縣	一八七、六六一	一、一四二、六九七
愛媛縣	二三九、五〇九	一、一四二、一一五
栃木縣	二〇五、三六〇	一、一四一、六三六
山口縣	二四九、一八八	一、一三五、六三七
山形縣	一七六、九八四	一、〇八〇、〇三七
秋田縣	一六七、〇九五	九八七、七〇二

岩手縣	一六二、九六五	九七五、七五一
大分縣	一九〇、三一八	九四五、七五一
青森縣	一四八、二九一	八七九、八一四
和歌山縣	一七七、四五五	八三〇、七三四
富山縣	一五〇、六六一	七七八、九六三
宮崎縣	一四八、〇〇六	七六〇、四五〇
石川縣	一五五、〇八四	七五六、八三七
島根縣	一五七、五六八	七三九、四七三
香川縣	一五〇、一五三	七三二、八一八
高知縣	一五三、九五七	七一八、一五七
徳島縣	一四四、五四〇	七一五、五三七
滋賀縣	一四七、九六三	六九一、六三一
佐賀縣	一二八、七三八	六九一、四五二
山梨縣	一二二、〇一二	六三一、〇三七
福井縣	一二八、三〇八	六一八、一四一
奈良縣	一二〇、三〇二	五九六、二二二
沖繩縣	一二三、二七四	五七七、五〇八

この表を見て面白いことは世帯数と人口数とが一致しないこと、大都市のある府縣は世帯数も多く人口も多いが、福岡、群馬、宮城、栃木、岩手、青森等はその隣の左翼の縣よりも世帯数が低くて總帯人口が多い。同時にこれら東北地方のみでなく、鹿兒島や宮崎のごとき九州の南の地方も亦各其左翼の縣よりも世帯数が低くて人口が多い、この事は單に上

地廣闊な地理的事情にのみ歸すべきものでなくて、人文上の原因によるものであらうと考へる。

つきに六大都市の世帯及人口數をかゝげる。

	世帯數		人口	
	男	女	男	女
大阪	五〇、〇〇三	二、四三、五五九	一、三三、八六六	一、一〇、七三三
東京	四四、六〇〇	二、〇〇、五五九	一、二七、七七七	九四、七三三
名古屋	一〇、三五九	九〇、七〇三	四七、〇一六	四〇、六八六
神戸	一六、三三七	七七、五九六	四六、三〇五	三八、五一一
京都	一〇、〇七五	七五、二四三	三六、七三六	三六、四四六
横濱	一三、五九六	六〇、九五六	三三、四七七	二六、八八九

(昭和五年十月一日現在、十二月八日速報)

○兵庫縣宍粟郡三方村の粟

粟が最近米國へ輸出されて好評であるのみでなく、支那粟や朝鮮粟が輸入される勢に見て兵庫縣の三方では今度各戸に丹波粟五十本づゝを最寄の空地に植付け十ヶ年後に七百石以上の生産を期してゐる、三本を一坪の割合で各戸五畝歩づゝを全村五百戸にわかち二十五町歩の粟林に二萬五千本を仕立て、五ヶ年後から實を採集し、十年目には平均一本三升の粟がとれる、一升五十錢と内輪に見積つて一戸平均一石五斗、七十五圓の收入とする、全村七百五十石、三萬七千五百圓の收入を得やうといふのである、これは勘定どほりにうれるかどうかはわからぬが、農村の参考と思つてこれをするす、丹波では既に粟林で二三百圓の收入をあげてゐる家は數が多い。

質疑 應答

○隴南のタンゲステン

江西省の南の方からタンゲステン鐵が出だしたのは民國四五年の頃で、六、七年には公司各所に簇出し裕豐公司の如きは資本四十萬元を擁し鐵砂の運送販賣に當り、華南華盛等の公司は技師を招聘し發見鐵區三十餘箇所に達し七、八年の頃には一ヶ月の輸出四百餘萬元となり、江西及廣東商人は總て公司を組織したが大戰の後暴落したけれども土民は依然採鐵をつづけ民國十年海外のタンゲステン市價回復に乗じ廉賣したので業務は再び股盛となつたしかし革命のために十六年には一度沈滞したが最近は稅局を隴州及大庾の二箇所に設け密賣をふせいでゐる、隴南縣の龜尾山を第一の産地とし大庾崇義二縣々界の諸山脈が之につぐその産量は一一七、六五〇擔に達し、一擔の價十一元九十一仙見當にして、産地上海間の運賃税金其他十二一角二分を要するから上海では一擔につき二十四元になる(一噸四百〇四元餘)

質疑 應答

問 中央アジアの交通と住民及産業

答 鐵道はもと中央アジア鐵道及タシケント鐵道であつたが、今回ノボシビルスクに達するトルクシヤ鐵道がついたから交通上の面目を一新しかけてゐる、ことにこのトルクシヤ線の支線を支那新疆省にむけて、一は露支國境のザイサン